

飛鳥資料館の特別展示

飛鳥資料館

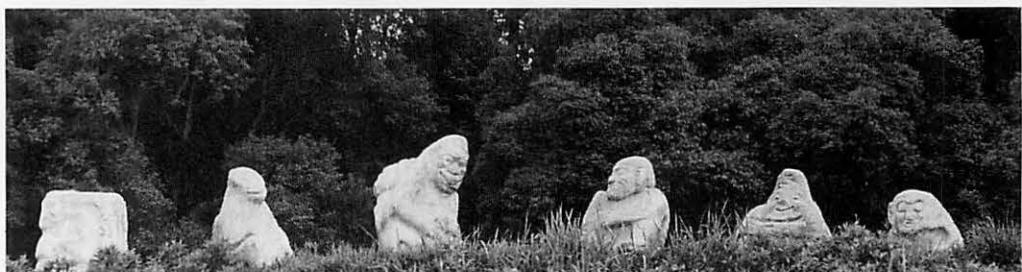
特別展示「飛鳥寺」 昭和30年、当研究所は、初めて飛鳥の地で、飛鳥寺の発掘に着手した。その後中断があったものの、以来20次以上にわたる調査は、古代史研究に画期的な成果をもたらしている。その成果を観覧者が一目で理解できるように展示してみた。会場に入ると、正面に発掘遺構模型（縮尺50分の1）を置き、その上にアクリル樹脂製の仏殿及び回廊を建てた。

300m四方の寺域の中に塔の北、東、西に金堂を配した最古の伽藍配置を見せ、現在の安住院本堂の位置を理解しやすいようにした。模型につづいて、塔心礎の発掘状態を再現してみた。これは、実大の塔心礎模型を作り、舍利孔の周囲に挂甲、馬鈴、蛇行状鉄器や金銅製莊嚴具などを置くと、これまで、写真や実測図でしか知られていなかった状況がよく理解でき、一般的の入館者はもちろん研究者にも大好評であった。

埋納物の中で最も注目されてきた挂甲は、ここ数年来復原を試みてきたが、やっと完成し、人形に着装してみた。この挂甲は甲冑史のなかで、古墳時代と歴史時代をつなぐ資料であり、その復原は高く評価された。

この展示で最も話題を集めたのは第2展示室を使った飛鳥大仏の再現イメージである。如来像を金色の実大パネルにし、前には朱柱を立て堂内の雰囲気を作つてみた。なお「元興寺伽藍縁起并流記資財帳」（重文）や、近世の安住院の様子を記した井村家文書なども展示した。

特別展示「飛鳥の石造物」 当館では、展示方法を万葉集、宮殿、寺院、古墳、石造物の分野別に展示している。毎年、入館者へのアンケートの回答では、古墳、石造物への関心が非常に高い。多くの要望に答えた石造物の展示を試みた。全体の構成を館内と館外の前庭とし、館内では、近世文人達の石との出会いを陳列し、また、龟石については川原寺の結界石とする東寺文書を並べた。また、益田岩船文書の空海碑文台石説を示す「大和州益田池碑銘并序」（国宝）など石との関連資料を展示した。第2展示室は、元禄15年猿石が掘出された後、梅山塚（欽明陵）に並べられた状態をレプリカを使って復原した。また、前庭では、岡と出水の酒船石を車石で連結し、水を流した。また、須弥山の下段の四方にあけられた小孔から水を出し、齐明年間の饗宴の飾り物を再現した。前庭部の水の仕掛けについては多くの関心が集った。（猪熊兼勝）



猿石再現イメージ